2022.07.22.
T.Kobayashi

新しいものが　良いものなのか
その前に　まずは心構えを

＜1＞　ＡＩを過信するな

言葉が先行して、意味や意義があとから追いかけてきて、追いついてきた時（世の中に現実に実現して活躍する頃）には、本来の意味とは少々ずれが生じることが多々ある。
そのひとつの例として、現在進行形ではあるが、目下発展途上にある「ＡＩ」についてもそんな気配を感じることが増えてきた。
近頃、「ＡＩ」という言葉が一般社会に浸透するにつれて、「ＡＩ」とは絶対に正しいものであるかのような勘違いが広がっていることが心配である。
「Artificial Intelligence 人工的に作られた知性の塊」は、人間が作るものである。人間がこれを作る段階で、どこまで完璧に作り込まれるのかによって、性能や品質に大きな差が出ることになる。
例えば、「ＡＩを応用した野菜の種別分類装置」ができたとしたら・・・。
「リンゴとはこういうものである」ということを定義する項目にいくつかの不足があったら、このシステムでは「リンゴとトマトの区別」ができなくなる。
世の中では、流行病のように「ＡＩが判断する」とか「ＡＩを応用した」とか言って如何にも完璧を装う商品が出回ってきたが、ちょっと立ち止まって疑いの目で見ることを忘れないで欲しい。

＜2＞　自分の分身

近頃頻繁に目にし、耳にするようになった言葉のひとつに「メタバース」がある。
「メタバース」は、「Meta（超)」「Universe（宇宙)」を語源とする合成語（造語）である。外来語として日本語の世界に登場させるにあたって、表記は「メタヴァース」とすべきだったように思う。
コンピュータやネットワーク上に構築される「三次元で表現される仮想空間」という、俗人には理解が難しい代物。
まるで仮想の空間（Virtual　Reality）を作り上げることも出来るし、現実に存在する空間を模した仮想のもの（Augmented　Reality）を作り上げることもできる。日本語としては、VR は「仮想現実」AR は「拡張現実」と言っている。VR は、英和辞典で素直に訳すと「増長・拡大した現実」となる。
そして仮想の空間の中で自分の分身が行動することになると、それをアバターと呼ぶ。
アバターは、英語の「Avatar」で、これもまた日本語読みするなら「アヴァター」が正しいようだ。
語源はサンスクリット語の「アヴァターラ」で、「化身」「具現」などの意味を持つ言葉らしい。
住宅販売会社がセールスツールとして「完成予定の家屋の内覧」のためのビューワーを作って、お客様に新居の中を体験していただくことで、より現実味を感じていただく例がテレビで紹介されていた。
また、高度な技術を要する難易度の高い外科手術の訓練装置や、支援装置などへの応用も具体化してきているらしい。
コロナウイルスへの対応訓練用の装置が作られると、医療関係者はもとより一般の患者なども、実際に罹患した場合の体験学習が出来るので、予防策や感染した場合の対処の訓練にも役立つかもしれない。しかしそうなると、自分の分身（アバター）が感染して重症化して入院し、人工心肺機能（エクモ）の世話になることに・・・・・。まさに「アバターもエクモ」という落とし噺に。

＜3＞　人間関係のプロトコル

SNS で知り合った男に誘われて、男の家へ遊びに行った結果、殺されてしまった女性。
SNS で声をかけたら集ってきたメンバーの一人に利殖の話を持ちかけられて、その話に乗った結果大きな損金が発生した。などなど、SNS が介在する犯罪被害が数多く報道されるようになった。

SNS とは Social Networking Service の略語で、インターネットを使って「人と人・人と集団・集団と集団などをつなぎ合わせるサービス」である。
不特定の人が、不特定の人とつながる場としての「可能性」は大きいかもしれないが、あくまでも「これを利用する人達が善人であれば・・・」のことである。
コンピュータや情報システムやネットワークが世に登場する前のことを考えて見る。
不特定の人々が錯綜する世の中へ出た「人」は、「人」の顔を見て、声を聞いて、小さな接触から始めた上で「相手の信を確かめながら接触度合いを調整してきた。このように「人と人が結びつくための手順」を踏むことで「安全な人選び」をして、状況判断をしながら「人との関わり方の深度調整」をしてきた。
動物の世界でも同じ様な手順が存在するようで、「生き物が安全に生きていくための手順（プロトコル）」と言うこともできる。
こうした「自らが構築すべき認証の仕組み」を省略して、不特定の人々との交わりに入って行くことは裸で戦場へ行くようなものである。
社会で生きていくためのプロトコルをまだ身に付けていない若者が、このような世界へ飛び込んでいけば、多くの危険が待ちかまえているのは当然のことである。
「何かが欠けている」ままで、「何でも出来る」世界へ、「心構えが裸のままで」入って行くことの危険性を考えて見れば、起きるべくして起きている事件と言うことも出来るのかもしれない。

＜4＞　After the festival
入学試験の会場での、スマートフォンを使用した犯罪が発生した。受験生が試験問題を撮影して外部に送信し、模範解答を得て答案に書くという「入試不正」。
技術的には可能な手口ではあるが、精緻に事を運ぶ必要があり、誰でもできる手口ではない。
その昔、入学試験や自動車運転免許試験の時、「机の上に置くことが許されるものは鉛筆と消しゴムだけ」だった。その他の荷物はカバンにしまって机の下にしまうようになっていた。
スマートフォンは、電話機でもありコンピュータでもあり、カメラでもあり辞書でもあり何でも教えてくれる万能に近い端末機で、無線でどこへでも接続することができる。
このような時代に、試験の会場へ持込みを許す物品やそれにまつわる規則と点検は充分だったのか。
甘い仕組みと甘い規則、旧態依然とした運営の方法でまかり通っている方が不思議である。
道具が出来てから運用の規則を後追いで作っていく、こんなやり方では問題はいくらでも発生する。
ドローンや空を飛ぶ自動車、無人の自動運転自動車、自動自走機能のある軽車両類などなど、問題含みの「次世代インフラストラクチュア」のアイデアは山ほど打ち出されており、すでに社会実験・公共実験の段階になっているものもあるようだ。
普及し始めて、しかもいくつかの事故や問題を起こしてから運用方法や規則を考えるのでは後の祭りと言わざるを得ない。

以上